

---

# 蒼い太陽

志那都比古神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼い太陽

### 【Nコード】

N2909L

### 【作者名】

志那都比古神

### 【あらすじ】

陽気太陽。その名の通り、元気一発、ポジティブ、活発な高校生  
って訳でもなく・・・冷静沈着な普通の優男。

周りにいるのは天才、鬼才という濃いメンツ。ただ1人、普通である  
と自覚している太陽も自覚ナシのイケメン朴念仁。そんな色濃い  
メンツの引き起こすトラブルに太陽も参っていた。そんな時、転校  
生として一人の少女が現れる。それが太陽をさらに苦悩へと導く  
だった。

「俺の・・・日常は何処へ？」

これは蒼い太陽の周りの、学園アクションコメディである。

何かと皆、武術を嗜んでおり、強いです。

## ハジマリ。 (前書き)

処女作です。まだまだ未熟者ですが、読んで頂けると幸いです。

## ハジマリ。

朝。俺はいつもと同じように規則正しい目覚ましの電子音によって目を覚ます。目をこすりながら周りを見渡すと、いつもと同じ簡素な俺の部屋。

勉強机、ベット、本棚、パソコンなど、必要最低限のものしか置いていない。再度時計を確認すると、午前6時半。まだ登校までには時間があつた。

「よし、寝よう。」

一大決心をして布団をかぶり、夢の世界へ旅立とうとするとある違和感を覚えた。

体が動かないのだ。主に下半身を動かそうとしても動かない。

もしか、金縛り!?

即座に頭を振る。金縛りなんてありえない。俺は元々神様や幽霊の類は信じないし。それとも、足がつつたのだろうか？ にしては痛みが感じられない。

もう一度動かそうとする。すると、

「んっ……。」

ぎゅっと締め上げられた。

締め上げられた？

……

嫌な予感がして思いつきり布団をめくった。

「すう・・・すう・・・」

そこには、俺に抱きついて寝ている幼馴染の姿があった。

## ハジマリ。(後書き)

なににせよ小説は初めてのことで上手いという保障はこれっぽちもありません。自虐的なんですが(笑)。

ちまちま頑張っと思っています。

1：太陽と、朝。（前書き）

考查があつたんで遅くなりました・・・

## 1：太陽と、朝。

朝。俺、陽気太陽ヨウキタイヨウはいつものように規則正しい目覚ましの音に目を覚ます。早速期待を裏切るようでんだが、俺は決して”太陽”のような明朗快活元気一杯少年というわけではない。常に冷静沈着、何事にも動じないむしろ月のような人間だ。つまり、親の期待を見事に裏切ってしまったということになる。この名前はやはりあいつのほうが似合うだろう。

そんなことを考えながら上体を起こし、目をこすりながら時間を確認。よし、いつも通りだ。

さつさとリビングへ向かおうと布団から出ようとする。

体が動かない。

・・・・・・・・・・

よしここは冷静に状況分析だ。  
俺、起床。時刻確認。不動の体。

?????

・・・・・・・・・・

金縛り!?・・・違うな。俺は何も恨まれるようなことは・・・してないと思う。

はっ！足がつった!?・・・にしては痛くない。  
腕を組んで詮索中。

詮索終了。結果・・・不明。

そんな時、

「うん・・・」

妙な声がした。俺の声とは相反するソプラノボイス。

ふと自分の体を見るとなぜか腹のあたりが膨らんでいる。先に言うておくが俺はデブじゃない。普通の体系だ。

・どこからともなくソプラノボイス。

・膨らむ俺の腹。

この二つの事実から、最悪の可能性が脳裏をよぎる。いや、そんなわけないよな、うん。

ぴらつと布団をめくる。

寝巻き代わりにジャージを着た俺の体が目に映る。ま、当然だが。

そこには俺に抱きつく不審者Aがいた。

・・・・・・

ドン！

「きゃんっ！」

俺は無言で不審者Aを引っぺがし床へ落つことしといた。まあ、その際聞こえた悲鳴は右から上へ受け流し、再び夢の中へ・・・「えい！！」「ぐふっ！」

いきなり腹に鈍痛が走った。

「おはよう、太陽」

痛みにうつすら目を開けると、そこには俺の腹に倒れている笑顔の幼馴染、シスカワツクヨ静川月夜の姿があった。

シスカワツクヨ静川月夜。各学校に一人はいそうな超人である。成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。様々な賞賛の言葉が彼女には送られるだろう。しかも、そのもの静かそうな名前とは裏腹にとても人懐っこい。そのため、誰とでも話せ、友人も多く、人望も厚い。しかも彼氏がないとだけあってさらに人気がある（主に男子から）。

「で、なぜお前がここにいる？」

俺は痛みによって覚醒した目を向けて尋ねた。

月夜は一瞬キョトンとしたが、言葉の意味を理解したのか、

「それは私たちが幼馴染だからだよ！！」

と満面の笑顔でおっしゃった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

確かに俺と月夜は幼馴染だ。幼稚園時代から現在の高校生活にいたるまでの腐れ縁である。

だが、

「なぜお前は俺の家にいる？」

こいつの家は向かいに建っているはず。いつもなら朝の支度を整えた後、俺の門の前で合流し、一緒に学校へ行くはずだ。・・・そこ、羨ましいと言わない。

なのにこいつは俺の布団の中に入っていた。俺が疑問に思うのも当然だろう。

答えを促す俺に対して月夜は

「それはね・・・」

「それは？」

なにやら含みを持った言い方に少し戸惑いつつも、先を促す。

「今日から同棲することになったのです！！！」

・・・は？

## 2：太陽と、同棲。（前書き）

いろいろあつて更新が遅れました。すみません。

## 2：太陽と、同棲。

「いやいや・・・スマン。耳の調子が悪いようだ。もう一回言ってくれ。」

間違いであるという一筋の希望を込めつつも、再確認。

「だから。今日から私たち同棲するの。」

・・・・・・ma j i d e ?

月夜に詳しい説明を求めたところ、すぐに答えてくれた。

「現在、俺たちの両親は旅行に行っている。」  
だ、そうです。昔からの友人だからね。

・・・・・・

いやいやいやいや・・・

さすがにまずい。

ただでさえ月夜が幼馴染とあって男どもから妬まれているというのに・・・いきなり一つ屋根の下で暮らしています。って・・・知られたら恐ろしい。

よし、

対策を講じねば。

すぐさま俺は月夜へ向き直り、がしつと月夜の両肩に手を置く。

「ふえ！！！！太陽ど、どうしたの！？」

月夜はいきなりの俺の行動に困惑しているらしい。心なしか両親が

赤いが・・・風邪か？

俺は落ち着いてゆっくり話し出す。

「月夜。約束してくれ。二人だけの約束だ。」

「え、えと・・・なにを約束するの？」

なぜか目が泳いでる。変な奴だ。

「簡単なことだ。俺と住nderことは秘密にしてくれ。でなければ俺の命が危うい。頼む！！」

至極真面目にお願いしてみた。

「・・・なんだ。そんなことか。」

月夜は残念そうに言う。

「そんなことって・・・俺の生死を決めることだぞ。じゃあお前はどんなこと言われると思ったんだ　よ？」

「それは・・・その・・・」月夜がますます赤くなる。やはり風邪か？

「なあ、お前風邪引いてるのか？顔赤いぞ？」

「・・・鈍感！」

「???なんのことがよく分からんが約束してくれるんだな？」

「・・・うん。分かった。でも・・・。」

「でも？」

「これで太陽の弱みが握れた♪」

「・・・え？」

「てめえ！！冗談じゃねえぞ！！」

「あゝ怒ったらバラスよ、皆に同棲してるってこと♪」

こゝこいつ・・・こうなったら、

「はあ。分かったよ。じゃあいいから飯食うぞ、飯。」

話を変えてみる。

「うん」

案外簡単に引き下がってくれた。朝からいつもより機嫌がよさそうだが・・・なぜだ？

そうして二人で朝食を食べ、学校へ行くことにした。

なんか嫌なことが起きそうな気がした。はあ・・・。

## 2：太陽と、同棲。（後書き）

人称変わっているかもしれませんが気にしないで下さい。

### 3：太陽と、登校。

結局月夜と共に登校することになった。

ちなみに俺たちが今登校しようとしているのは「私立奏零学園シリッソウレイガクエン」という学校だ。学校設備も充実し、校風も自由なため、ここを目標にする生徒が多い。まあ、俺はただ近いからという理由で選んだだけだが。俺の家からは歩いて十五分ほどである。

「よお、太陽！静川！」

数分ほど二人で歩くと突然後ろから声をかけられた。

同時に振り返るとそこには一人の男が立っていた。

騎馬鹿彦キバシカヒコ。去年からの俺の友人で、名前にもあるとおり、馬鹿である。どれくらい馬鹿かというと神様が生暖かい目で見つめてるくらい？馬鹿である。

「あ、おはよう！騎馬君。」

いつもどおり月夜が笑顔で挨拶。それに彼は、

「おう！」と笑顔で返す。俺とも互いに片手を挙げて「ウッス。」と挨拶。

しばらく三人で談笑しながら歩いているとふと鹿彦が、

「そっぴや、今日転校生来るってよ。」

と言ってきた。

ちなみに彼は女のことになるとすごい。いろんな意味ですごい。彼の脳の約八割は女のことである。

だから転校生も女だろう。全く、その煩惱を和尚さんに振り払ってもらいたい。

「俺の脳はそこまで女の子のことは考えていないわ！！てか女の子

のことを考えれなくなったら俺は死ぬ！！死んでしまっ！」

どうやら思考が漏れていたのか、鹿彦が反論してきた。

しかし死ぬとは……。月夜も一歩後ずさったではないか。口の端も引きつつてるし。

俺は月夜を呼び寄せ、小声で話す。

「月夜。最近あいつやばくなってきてねえか？」

「……。うん、そうだね。」

「たとえあいつが変な奴になっても二人で温かい目で見守ってやるうな。」

「うん、そうだね。……。二人で……。か。ふふふつ。」

最後のほうは小声で聞こえなかったが同意してくれた。

「ちょ、そこ聞こえてるんだけど！！……。あ、やめて！そんな汚物を見るような目で俺を見ないで！あでも静川にならいいかも……。」

もう変態だった。

「……。行こ、太陽。」

「ああ、そうだな。」

ということは無視を決め込むことにした。

「あ、ちょっと！！！待って！！！置いてかないで！！！」

そうやっていつものように鹿彦いじりをしながら登校している俺たちだった。

さらに数分歩くと、一人の女性が声をかけてきた。

「月夜と太陽と……。馬鹿、おはよう。今日もいい天気だな。」

「あ、花恋ちゃん！おはよー！」

「おお、花恋。」

「俺は馬鹿じゃねえ！！！」

アネシバカレン

姉柴花恋。月夜の中学生のときからの友人で俺とも面識がある。あ、馬鹿とも。

苗字にもあるように言葉遣いや容姿が姉のようである。多くの女子生徒に慕われており、男子生徒にとっては憧れであり、一部からは「姉御」「お姉さま」などと呼ばれているらしい。容姿は月夜に負けず劣らずの美貌で、長い黒髪が一層姉成分をプラスする。勉強は月夜について次席ね。ちなみに剣道部である。

見た目的にもなんら問題のない女子高生である。ただ一つの部分を除いて。

一応本人に忠告してみる。

「なあ、花恋。いい加減その刀帯刀するのやめろよ。」

そう、彼女はいつも腰に木刀を差しているのだ。それを忠告しても、「む、これは乙女の嗜みだ。こればかりは太陽からの忠告でも引かんぞ。」

ふいつと横を向く花恋。そういう仕草は可愛いのに……。全くどこの乙女が脇に刀を差すのか教えて欲しい。

そのまま四人で談笑しながら学園へ向かって歩き出す。

しかしそのとき俺は安堵していたのかもしれない。

他愛もない会話。いつもの登校風景。そついういつもと変わらない日常に。

今思うとそれは嵐の前触れだったのだ。

そつ、転校生が引き起こす嵐の……。

#### 4：太陽と、生徒会長。

私立奏零学園。全校生徒3000人あまりで、一学年1000人くらいのマンモス級の高校である。校風は前にも言ったが自由で生徒重視。また、校舎も広く部活動もかなりの数あり、盛んだ。それらのためにここを目標にする奴も多い。一応進学校なので入試は難しかったが入ってから今までの3年間、少なくとも後悔はしていない。周りの奴らのせいで頭痛は覚えるが。

学園に着き、校門をくぐると、少しばかり注目を浴びる。主に花恋と月夜。まあ、容姿端麗、運動神経抜群、学業優秀な二人なので当然だが。そして怨念のようなオーラが俺と鹿彦に降りかかる。羨ましいとでも思われているのだろう。

「なあ・・・太陽。なんかいつも以上に殺気立ってねえか？」  
怯えながら鹿彦が言ってきた。確かに殺気の数がいつもより多いような気がする。何故？と思考しようとしたとき、ふと肩の異変に気づく。肩が重いのだ。そう、誰かが俺に負ぶさっているように。

「なあ・・・太陽。なんかお前の肩に生徒会長っぽい人が抱きついてるんだが・・・気のせいかな？」

鹿彦の目は俺の肩へ向けられていた。せつかく無視しようと努めていたのに・・・。

「たーくん！おっはよー」

「・・・ああ、おはよう。奈波。」

幼さの残る声と共に俺に声をかけてきたのは七条奈波<sup>シチジョウナナミ</sup>。この学園の生徒会長だ。145センチくらいの低身長とは裏腹に胸が大きく、俗に言うロリ巨乳というやつだ。その笑顔は見るものを癒し、その泣き顔は人に罪悪感をもたらす。人付き合いはとてもよいため、誰

とでも話せる。そして彼女も成績優秀、容姿端麗で、ファンクラブなんてものもある。生徒会長となったのはそれらの所為もあるだろう。

なぜか俺になついているが。

そして今の状態、かなり危うい。恐らく俺の知り合いの中で一番大きいであろう胸が俺の背中当たっているのだ。

「奈波ちゃん!!!太陽が嫌がつてるでしょ!!!離れてよ!!!」

月夜が奈波を引き剥がそうとする。

「やだよ。たーくんの背中あつたかいんだもん。・・・ふみゅ。・・・」

「寝るな、奈波。」

「・・・ん?・・・わわっ。あたかすぎて思わず寝るところだつたよ。」

「もう寝てただろうに・・・。」

「ふみゅ・・・。」

「・・・」

こんな些細でくだらないやりとりを数回繰り返した後、やっと奈波は降りてくれた。

「そういえば奈波ちゃん。転校生について何か知ってるでしょ。」

ふと月夜が尋ねた。まあ、確かに生徒会長ならば何か知っててもおかしくはない。

「ふふっ、知ってるよ。でもたーくんのほうが知ってたりして。」

「

「はあ?奈波、俺は知らんぞ。」

なんせ転校生だなんて今日馬鹿に聞いて初めて知ったからな。

「それはどうかな。」

「?」

「ふふっ、見れば分かるさあ。じゃあねえ」

そう言って奈波は話をうやむやにしたまま走り去っていった。

にしても俺と関係ある高校生ねえ……。正直言って誰も思い浮かばない。俺は子どもの頃からずっとここに住んでるわけだから……。友人たちは皆奏零学園に入っているわけだから……。

「太陽、どうしたのだ？ 悩み事か？」

歩きながら考えているのを不審に思ったのか、花恋が聞いてきた。

「ああ、いや、さっきの転校生のことでな。奈波の情報は的中率高いからな。」

そう、奈波はどんな裏情報でも知っている。生徒、教師一人ひとりの弱み、性癖などのプロフィールや裏社会の情報などどんなことでも知っている。情報源は教えてくれないが。

「ふむ。まあ考えても仕方がないだろう。いずれ分かるさ。」

確かに。いずれ転校生の来るクラスをちらつと覗けば否が応でも分かるだろう。

「そうだな。」

そうして転校生についてはさっぱり忘れることにした。そう、深く考えずに行こう。

今思えばその判断が間違っていたのかもしれない。転校生は俺に甚大なる被害を与えることになるとは知るよしもなかった。

てか俺の人生って……。後悔ばかりじゃん。

5：太陽と、銀髪少女。（前書き）

遅れました・・・。

いろいろありまして。いや、言い訳するつもりはけっとうありません。

いや、その・・・すみません・・・。

## 5：太陽と、銀髪少女。

月夜たちを連れて自分の教室である3-1へ入ると、もう奈波が情報を書いたのか、教室は騒然としていた。ちなみに俺、月夜、花恋、鹿彦は共に同じクラスである。クラスに入ると月夜、花恋は女子の輪に混じっていき、鹿彦は教師に捕まった。涙目で助けを求めてきた彼に、最上級の微笑を返してやった。どうせ勉強をことだろう。

俺はささっと自分の席へ移動した。俺の席は一番窓側の一番後ろ。居眠りにもってこいの席である。

「よお、太陽。」

丁度席に着いて教科書類を準備していた前の席の男子が声をかけてきた。こいつは俺の親友の高宮蓮。タカミヤレン男バレーの月夜と違ってくれてよい。ようは、完璧超人なイケメンサッカー部という、女子が憧れ男子が妬む存在だ。無論、性格も優しい。

「おう。ところで蓮、この様子だと転校生のことは・・・」

「ああ、知ってるぞ。どんな子かなあ・・・」

「さあな。」

「何だよ、いつもにまして淡泊な反応だな。ひょっとして知り合いか？」

「何やらあくどい笑みを浮かべてくる。こいつは俺の苦悩を笑って楽しむ楽観主義的性格があるからな・・・」

「いや、違う。ただ奈波が俺の知り合いかもって言うてきただけだ。」

「んだよ、知り合いじゃねえか。」

「いや、まだ決まったわけじゃ・・・ねえ。」

「そんなこといったってなあ……。七条の情報だろ？」  
「……」

確かに奈波の情報が外れたことはない。テストの点も、恥ずかしいエピソードも、彼女には筒抜けなのだ。絶対敵にたくない人ナンバー1だ。

「……寝る。」

よって現実逃避を決め込むことにした。

「おう、いい夢見ろよ。」

ニヤニヤしながら言うてくる親友を最後に俺の意識は闇へと堕ちていった。

懐かしい夢を見た。幼い俺と、誰かが遊んでいる夢。遊んでいるのは可憐で、珍しい銀髪の少女だった。どれだけの時間が分からないが、少女と俺は一緒にたくさん遊んでいた。少女は気弱なのか、あまり会話が得意ではなかった。でも楽しそうだった。

それも突如終わりを告げた。

少女は言った。

「私……。ね……。外国へ……。行くことになったの。」

「え？」

「だから……。ウツ……。ヒック……。もう……。会えないの……」

少女は泣いていた。感情変化の乏しい彼女が泣くのを、俺ははじめて見た。だから彼女を泣き止ませて安心させたい、幼いながら俺はそう思った。

「……。大丈夫だよ。」

俺は彼女を抱きしめた。思ったより小さく、細く力を入れてしまえ

は容易く壊れそうな体だった。

「きつとまた会える。いつになるか分からないけど・・・きつと会える。」

「・・・・・・うん。」

確証はなかった。でも彼女を安心されるのには十分だったらしい。

それから二日後、彼女は旅立った。

彼女の名前は・・・「た」・確か・・・「太よ」・・・

「太陽つてば!!」

ふいに現実へ引き戻された。重い瞼を開くと、目に映ったのは月夜、花恋、蓮の姿だった。とりあえず挨拶。

「・・・はよ、皆さん。」

「はよ、じゃねよ。もう昼だつつの。」そう言う蓮は呆れ顔だ。

「え？」

我が腕時計で時刻を確認。十二時四十五分。

「まじかよ・・・」

がつくりと机にうなだれる。学校の半分の眠りで消化してしまった。

ま、いつか。

「じゃあ飯食おうぜ。」勢いよく立ち上がる。

「それでいいのかよ・・・。」

俺のポジティブな考えに皆苦笑していた。

そう言うて俺たちは屋上へ向かった。屋上は解放されているので、生徒は自由に出入りできる。だから俺たちはいつも屋上で昼食を食べる。

あ、そういえば。俺は歩きながら軽く後ろを見て月夜に聞いてみることにした。

「月夜、一ついいか？」

「何？太陽。」

月夜は花恋との話を止めてこちらを向いた。

「転校生って結局どうなったんだ？」

そう、転校生が見当たらないのだ。クラスが出る前、見慣れない顔はなかった。

「ああ、転校生ね。何か用事で遅れて来るって…」

いや…遅れて来るって…もう昼じゃん。ホントに来るのか？と疑問に思いながら俺は屋上の扉を開けた。

すると先客がいた。別に生徒出入り自由だから人がいてもどうってことはない。しかし、その後姿はあまりにも奇妙だった。

銀髪なのだ。銀髪の腰くらいまであるストレート。いくらなんでもウチの学校に銀髪はいない。だが彼女はウチの学校の制服に身を包み、フェンスにもたれて街を眺めている。すると、彼女が転校生なのだろうか？

「誰だろう？」

「誰だ？」

月夜と花恋はそろって首を傾げている。

「なあ、太陽。まさか「言うな、おそらくは間違いない。転校生だろう。」

だが、何故ここにいる？校長室とかに行くはずだが。てか月夜の話じゃ遅れてくるって…。

疑問が次々浮かんでくる。月夜たちも同様のことを考えているのだろう。思案顔になっている。

しかし考えたってどうにもならない。理由は本人に聞くのが一番だろう。

「なあ。」

1人彼女の二歩くらい後ろまで近づき呼びかけてみた。

誰かに声をかけられたのが分かったのか、彼女は振り返った。

美少女だった。高い鼻と碧眼、小さい唇。プロポーションも月夜とかと負けず劣らずで身長が女子にしては高い。だとすると美人といったところか。

「・・・何？」

声をかけたのに黙りこくった俺を不思議そうな目で見つめる女子。といっても表情に変化はないが。

「いや、なんでもない。ところで君が転入生か？」

コクリと頷く転入生。どうやら口数の少ない人らしい。

「何故こんなところに？」

「・・・迷った。」

「・・・マジかよ。」

「そう・・・か。何なら案内してやろうか？俺、太陽って言うんだ。よろしく。」

「・・・え。」

案内しようと扉のほうへ向かおうとしたら銀髪の子から驚愕の声が上がった。

「今・・・太陽って・・・。」

「ん？ああ、俺は陽気太陽だ・・・が」

振り返ると、彼女からはあふれんばかりの涙。

「太陽・・・太陽・・・会いたかった！！！！」

そのまま彼女は抱きついてきた。

・・・え？

俺、硬直。月夜たち、硬直。銀髪の子、涙。

しばらく時間が止まったかのように固まった俺たち。

その間聞こえてくるのは俺に抱きついてる子の嗚咽だけだった。

## 6：太陽と、説明と昼食。（前書き）

遅くなりました・・・。

短いです、マジで。

ごめんなさい。

## 6：太陽と、説明と昼食。

「つまり、君はあの時の子だったのか。」

「そう。」

今俺たちは屋上に丸く座って昼食を食べながら俺にいきなり抱きついてきた銀髪少女、水無月薫<sup>ミナツキカオル</sup>に説明を受けている。まあ、言葉数が少ないので俺が質問しているのだが。

質問に答えていくうちにどうやらこの子は朝夢の中で出てきた子であつたことが判明。・・・確かに銀髪を珍しがって近づいて一緒に遊んだ記憶はある。

「しかし太陽、お前スゲえな。あの水無月グループのご令嬢さんと知り合いだつたとは。」

蓮だけでなく、皆そのことに驚いていた。うん、俺も。あのときは俺も子どもだつたからどこの子なんて気にも留めずにただ一緒に遊んでただけだからな。

そういう水無月グループっていつたら日本の中で五本の指に入る大企業。いろんな職種に手を出しているし、傘下の企業もとても多い。年間何十億と稼ぐ経済界の大御所だ。

「まあ、ただ一緒に遊んでただけだけどな。」

「でもいつ遊んでたの？私、知らないんだけど・・・。」

月夜が怪訝な顔をする。確かに月夜は俺の幼年期からの親友だ。ほとんど毎日遊んでいた仲なのに薫を知らないことを疑問に思ったのだろう。

「ああ・・・つと。確かお前子どもの頃一週間くらい旅行行つてたろ？」

「え、あ、うん。」

「その時薫に出会つたんだよ。お前がいなくて暇してたからな。」

そう、あのとき俺の家の近くには友達は何も居なかった。俺は少し遠くの幼稚園に通っていたため休日ともなると暇でしやうがなかったのだ。ちなみに花恋たちとは小学校からの付き合いだ。

「へえ、そうなんだ。」

月夜も納得した様子だった。

「ところで薫とやら、君は武道をやっている、もしくはやっていたな？」

ふと、花恋が繰り出した発言に俺たちはまたか、と思った。

「柔道と合気道をやった。」

案の定やっていた薫。てか、やってたのかよ。

「では・・・一度、手合わせ願いたい。」

花恋はそう言つて真剣を抜く。

そう、彼女は言うなれば戦闘狂なのだ。相手の武道の経験を一瞬で見破り、手合わせを申し込んでくる。しかも一定以上の実力がある者をだ。彼女曰く、「弱いやつを倒しても意味がない。強い者と闘い己を磨くのだ。」 ちよつとおかしいですね、分かります。

くいくい。すると薫が俺の制服のすそをつかんでくる。

「どした？」

「・・・怖い。」

そう言つて薫はぎゅつと抱きついてきた。まあ、そりや怖いわな。いきなり真剣で試合したいとか言うんだもの。・・・てか薫俺に抱きつきすぎじゃね？しかもなんか抱きつくと月夜の視線が鋭くなるし。あ、目が合った。それも一瞬でふいつと横を向いて口を尖らす。ふむ・・・これは拗ねているな。あとであいつの好きなパフェを奢る。金銭的出費は痛いが止むを得まい。幼馴染とは仲良くやっていきたいからな。

流石に手合わせは忍びないので花恋を説得する。

「別にいいだろ、手合わせなんて。」

「いや・・・うん、どうやら私は君に負けてから大分焦ってるようだ。武士たるものを心を乱されてはいけないというのに。すまない、薫殿。」

うん、分かってくれて何よりだ。

「別に・・・いい。」

薫のほうも快く花恋を許した。まあ、闘ってもいい勝負にはなるだろうけどな。手や体裁きを見た感じ、どうやら薫はかなりの実力のようだし。

何はともあれ、一件落着。

## 7：太陽と、銀髪少女との日常。

その次の日、薫は正式に俺たちのクラスの一員となり、その容姿から一躍人気を得た。

のだが。

「・・・薫。そろそろ離れてくれないか？」  
「いや」

と、このように俺にかなりなついてしまっているのが現状だ。

時刻は2時限目が始まっているあたり。しかし現在、俺たちは屋上にいる。

理由は簡単。

数学の授業をさぼった。

どの教科も平均点くらいの俺の唯一の得意教科、それが数学でこの分野のみ俺は異常に出来る。どんなに難しいテストでも90点以上はかたい。そのため、この教科のみさぼりは黙認されているのだ。だから俺はいつものようにさぼろうと屋上へ向かおうとした。

そこで外部粒子が一つ。

「何でお前がいる？授業はどうしたんだ？」

「私・・・いつも太陽と一緒に」

「いやいや、答えになってないから」

屋上のドアを開けてみたら薫がいたのだ。そして俺が来るなり駆け寄ってきて左腕に抱き着いている（現在進行形）。

「それで？授業は？」

「さぼった」

「・・・いいのか？」

「私、水無月家」

権力ですね、わかります。

結局2人で1時間過ごすことになった。本当は寝るつもりだったの  
だがせつかくだからということで薫にいろいろ聞いてみた。

「そっぴや何でこの高校に來たんだ？」

「分かんない」

「は？」

「（クスツ）嘘。お父様が・・・行けつて」

おい。嘘かよ。だが笑顔が可愛いのでまあ許す。

詳しく聞いてみるとどうやらこの理事長が薫の父親と知り合いら  
しい。何故3年のこの時期かというところだそう。・・・水無月  
のトップよ、それでいいのか。

それにしても、

「いきなり転校なんて嫌だっただろ？」

聞くところによると彼女はそれまで白樺学園（じつかは）というお嬢様高校に通  
つていたらしい。だから転校することになって友達とかと離れて寂  
しくないのか？そっぴった意味を込めて言っただが、薫はきょと  
んとして（表情は微々たる変化だが）再びぎゅっと俺の腕に抱き着  
いてきて

「太陽に会えた」

最近彼女と会話がかみ合わない。

それから、のほほんとした平和的な会話を続けていると、ふいに  
眠気が襲ってきた。

目をこすっている俺が眠気と闘たたかっていることに気付いたのか、

「眠いの？」

「・・・ああ」

「いいよ」

どうやら寝てもいいらしい。だんだん彼女の意図が読めてきた気が  
する。

「じゃあ、チャイムが鳴ったら起こしてくれ」

そう言っただけはコンクリートの地面に横になり、誘<sup>いざな</sup>われるように眠気に身を預けた。

「おやすみ、太陽」

最後に見たのは隣で座りながらすかに笑う薫の姿だった。

ぱちつと目が覚める。そのままぼうつと辺りを見渡していたら、  
「夕焼け？」

・・・腕時計にて時刻を確認。 5時30分。

昼飯も食わずにずっと寝ていたのか。

しかも、とくに下校時間を過ぎていた。

勘違いしないでほしいがいつもこんなに寝てさぼっているわけじゃない。いつも1人の時は携帯のアラームにて3時間目開始前に起きるのだ。しかし今日は彼女がいたわけなのだが、

「薫、起こしてくれなかったのかよ・・・」

この元凶を作った彼女を恨めしく思っているとふいに俺の胸のあたりで何かが動く気配がした。

「うつん」

視線を俺の体に向けてみると悩ましげな声とともに俺の体をベッド替わりに眠っている彼女、薫がいた。

彼女は胸に頬を摺り寄せ、ぎゅつと俺の服をつかんで幸せそうな顔で寝ている。

それを見ていると、

「起こすのは忍びないか」

と思えてしまい。俺はしばらく手元にあつた薫の綺麗な銀髪を触り始めた。さらさらとしたその髪を梳<sup>す</sup>いていると彼女も何だか笑った気がした。

「なんか、すごく絵になってない？」

かなり不満そうに口を尖らせた月夜はそうこぼした。

校舎内へと続く屋上の扉。それは少し開いていて、3つの目が覗いていた。

「うん。流石太陽だな。一挙一動がかっこいい」

そう言うのは、腰に刀をこしらえた花恋。心なしか頬が赤い。

「くくくつ。2人の男女の逢引きとそれに嫉妬する少女。こんなドラマみたいな展開を引き起こすなんて……。だからあいつを見ているのは飽きないんだよなあ」

そう言う蓮はかなりこの状況を楽しんでいるようである。

「帰ってこないと思ったらこんなとこにいるなんて……。というか蓮君、何で太陽は立ち入り禁止のはずの屋上にいるの!？」

月夜は太陽の数学のときのさぼり癖は知っていた。しかしどこでさぼっているかは分からなかった。それでもいつも終わったら帰ってきていたのでどうでもよかったのだが。

今日は違った。いつまでたっても太陽が帰ってこないのだ。それだけならまあ寝てさぼっているうちに寝過ごしたと解釈もできる。

だが薫の姿もいつのまにか見当たらなくなっていた。

その2つの事実から月夜はあられもない想像が浮かんでは消え浮かんでは消えしていき気が気じゃなかったのだ。

昼休みになってもそれは続いて月夜は我慢できず太陽を探しに校舎を回ったが何せこの学園は広い。しかも探している途中、友人たちが話しかけてきてそれも応対しなければならなくて。

結局昼休みは終わり、放課後になってやっと太陽を見つけたと思ったら屋上にいた。立ち入り禁止のはずだから当然月夜は探すルートにも入れなかったのだ。

「どうやらあいつ、学園長から鍵を渡されてるらしいぜ」

「何で!?!」

「さあな。っていうか静川、知らなかったのか?」

「うん。うつつ、まさか幼馴染の私に隠し事があったなんて・・・」

「

そう言って月夜は涙目で太陽をにらむ。そんな動作にも可愛げがあるのだから流石といったところだろうか。

結局、この状態は薫が起きるまで続いたのだった。

## 8：太陽と放課後

「買い物？」

とある日の放課後の教室にて、俺は帰ろうとするところを月夜に呼び止められた。

「そう。あのね、冷蔵庫の食材がね・・・」

「もう尽きたと？」

「うん。もともとあんまり入ってなかったし。だから、一緒に買い物行こ？」

なるほど。だが、

「買い物の方は分かったが。いくら放課後であんまり人がいないとはいえあんまり大声で言うな」

「あたっ」

ペシンと月夜の頭を叩く。

俺と月夜が同棲している。

この事実は今だ二人だけの秘密事項となっている。無論、おいおい機会があつたら蓮たちには話すつもりでいるが、学校中に広まることは何としても避けたい。

そんなことになればファンクラブの連中が鬼の形相で引導を渡しに来るだろう。ただでさえ幼馴染ってことだけで目を付けられているのに。

「はあ。またあいつらを蹴散らすことになるのか。面倒くさい」

「ファンクラブの人達のこと？」

「ああ」

「で、でもそんな彼らに勇敢に立ち向かう太陽っ・・・かつこいい

よ？」

「・・・フォローになってねえけどな。とりあえずサンキュ」

「あつ」

ぼんぽんと月夜の頭を軽く叩く。そうして俺は先に歩きだした。後ろで恍惚とした表情で「飴と鞭・・・」とか言う月夜の声は、俺の耳に届かなかった。

買い物については何事も無く済んだ。

途中、月夜が腕に抱きついてきて大変だった。いつもはある程度のスキンシップはそのまま放置だが、公衆の面前はまずい。現にそのまま歩くと

「あらあら、奥さん。あちらにずいぶん若いご夫婦がいらっしやいますよ」

だの、

「ほんと。うちの子もあれくらい積極的じゃないと」

だの、

「くっそ！！美男美女のカップルめ！！」

だのと話す声がかつつり俺の耳に入ってくる。あ、最後に俺たちを睨んだ少年よ。ひとつ訂正を入れるが

俺は美男ではない。

一方の月夜はそれらの囁きにますます気分をよくしたらしく、幸せそうな顔で俺の腕にずっと擦り寄っていた。

俺はどうやら女性に弱いらしい。

その顔に負けてしまい、月夜は買い物が終わるまでずっと俺に抱きついていた。

その後、俺たちは荷物を置きに一旦家に帰り、月夜の誘いで近くの公園へ赴いた。

「ここに来るの・・・久しぶりだね」  
「そうだな」

幼い頃、二人で遊んだ公園。あのとき俺たちは二人だけだった。花恋や鹿彦、蓮たちとは小学校、もしくは中学校で知り合った。また、俺たちのうちが幼稚園から遠くて、近くにあまり友達がいなかったのもあり、俺たちは毎日幼稚園から帰ってから夕飯になるまで遊んでいた。

「太陽〜！」

いつの間にか月夜は公園のベンチに腰掛けていた。こちらを向いて笑顔で手をぶんぶん振っている。

その様子は、昔と何も変わらなくて。

俺は苦笑し、

「はいはい。今行きますよ」と

そう言っただけ向かおうとして、俺はぴたりと止まる。

「ねえ、その君。今暇？」

気づけば彼女はナンパされていた。

どこから現れたのか、金髪の、イヤリングをつけた、いかにもホスト風の男が親しげに話しかける。

「いえ、好きなひとを待っていますので」

しかし月夜は彼に視線を合わせることなく、きっぱり断る。どうでもいいが、今さらと大切な情報を流したような・・・。

「なあなあ、いいじゃん。あんなひょうい奴よりさ、俺の方が断然いいって」

なおも男はつつかかる。

そして月夜は顔を俯せてしまう。

そんな様子を見て、諸君はどうする？

うん、誰もが自滅覚悟でいくだろっね。美少女にいいとこみせよう  
って。

しかし俺は相変わらず公園の入口から動こうとしなかった。

数メートル先のベンチで知り合いがナンパされている。

当然そんな状況なら俺だって助けに行く。

ただ・・・その知り合いが月夜だったら話は別だ。

「なあ、行こうぜ」

男がそう言って月夜の腕を掴もうとした、その時。

「しつけないだよ、クズが」

月夜の口からそんな言葉が放たれた。あ、スイッチ入った。

ゆっくりと彼女は立ち上がり、顔を上げる。そこには先程までの可愛らしい笑顔など張り付いていなかった。目は釣り上がり、雰囲気  
が刺々しくなる。そして若干殺気も含まれていた。

「俺は太陽を待ってたんだ。邪魔だ、目障りだ、消えろ」

口調も一人称も変わっている。

男はそんな変化に一瞬呆気にとられたが、言われたことが癢に触つ  
たのだらう。

男は月夜に飛びかかろうとした。

「んだと！！このアマ！！ぶん殴るがはっ」

ドゴンツという大きな音がして、月夜の正拳が男の鳩尾を深く抉る。<sup>えぐ</sup>

男はそのまま崩れ落ち、白目をむいて気絶した。

一瞬の、出来事だった。

そうなんです。彼女も武道を嗜んでおります。あと、気性の荒い性格と、普段の穏やかな性格がある、ようは二重人格です。

月夜は興味なさげに男を一瞥すると、ゆっくりと俺の方へ歩いてくる。

彼女の豹変ぶりを見て現実逃避をする人は多いだろう。その彼女がこちらへ向かってくる。それだけで恐怖ものだが・・・

「太〴〵陽〴〵」

月夜はぼふつと俺に抱きついてきた。

「久しぶりだなあ、マイダーリン。元気だったか？」

至近距離での上目遣い。釣り上がった目はそのままだが、頬は僅かに上気していて色っぽい。どうも月夜は俺に対する愛情表現が過激なので。今も俺の胸に頬をすり寄せているし。んでもって月夜にはない大人の色気を兼ね備えている。

こちらの彼女とも長い付き合いであるが、未だに抱きつかれると・・・

・なあ。俺は動揺しつつも答える。

「つつああ。元気だ」

「そうか。それは良かった。最近は俺の出る機会も減ってな。まあ月夜が危険な目に遭ってないことだからいいんだが。それでも太陽に会えないのは寂しかったぜ」

そう言つて彼女は俺の胸の中でごろごろすりすり猫のように甘える。・・・暫く離してくれそうにないな。

俺はなおも早い胸の鼓動を抑えるために空を見上げたのだった。

## 8：太陽と放課後（後書き）

月夜<sup>つきよ</sup>・・・いつもの穏やかな方の少女。

月夜<sup>げつや</sup>・・・つきよに危険が迫ったときなどに出てくる気性の荒いもう一人の人格。太陽に対する愛情表現は過激。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2909/>

---

蒼い太陽

2011年11月13日13時17分発行